

[国 語]

小学校高学年における効率的・効果的な漢字指導に関する考察 －習熟しにくい既習漢字の抽出調査から－

大西 愛*

1 問題の所在

来年度より本実施される小学校学習指導要領では、4年生で学習する漢字に都道府県の漢字20字が追加され6年間に習得すべき漢字が1026字となった¹⁾。たった20字増えただけなのか、それとも20字も増えたのか。現場の教員としては、都道府県の漢字を4年生で学習する必要性を十分に理解しつつも、20字分の漢字指導の時間をどう確保するのかと悩む。

高学年の担任をしていると、限られた授業時数の中でどのように効率的に新出漢字の指導をするのかということを考えなければならない。他学年よりも教科数が多く、また学校行事でも中心的な役割を担う学年であるため、教科の時数の中でどう指導を工夫するのが児童の学力の定着につながってくる。筆者の経験上、漢字指導においても下学年のように時間を確保できないのが現状である。先ほど述べた、4年生で学習する漢字が20字増えたという状況と重ね合わせても、学年が上がるにつれて、より効率的に漢字指導を行いたいという願いがある。しかし、それは児童にとって効果的でなくてはならない。

小学校で漢字指導を行う際、一般的に担任は書きの指導(字体の指導)、読みの指導、意味の指導、筆順の指導などを行う。筆者は、これまで色々な学年を担当してきたが、漢字を書くという点について児童が習熟しにくい漢字が存在することに気が付いていた。どの学年を担当しても、必ず漢字の点画や構成要素に間違いが多い漢字が存在する。あるいは、下学年で学習しているはずであるが、高学年になっても同じ間違いをしているという場面に何度も出会う。児童が書く際に習熟しにくい漢字の点画や構成要素には何か共通点があるのではないかと推測する。仮に習熟しにくい漢字の共通点があったとして、指導者がより重点をおき指導を工夫することが可能であるならば、効率的・効果的に漢字指導ができるのではないだろうか。「特別の教科 道徳」や外国語・外国語活動の教科化、プログラミング学習の導入など、現場の小学校教員が今すぐに対応しなければならないことが目白押しである現状の中、漢字の効率的・効果的な指導方法が明確になれば、児童にとっても教員にとっても負担が減るのではないかと考える。

2 研究の目的

漢字指導において、菅野らは既習あるいは未習の構成要素を踏まえた指導は、効率的で児童生徒の負担を軽減できる可能性があるとし、新学習指導要領における学年別漢字配当表1026字種それぞれにおいて、点画・構成要素の出現頻度、動作パターンを分析している²⁾。菅野らは特に6種の点画(一|ハコㄣ)が重要であり、それを組み合わせる動作が多いこと、小学校3年生の段階ですべての基本点画が学習されることを明らかにしている。しかし、実際の児童にどのような点画で間違いが多いのかについては、検討されていない。

そこで、本研究では、高学年の児童において習熟しにくい漢字の抽出を行い、それらの点画の特徴や構成要素を明らかにすることを通して、より効率的・効果的な漢字指導の一助とすることを目的とする。

3 研究の内容と方法

(1) 既習漢字の習熟に関する調査

平成31年4月に5年生(27名)と6年生(26名)に対し既習漢字の習熟に関する調査を行った。調査対象とした漢字は、平成29年施行の小学校学習指導要領における学年別漢字配当表の中から、児童が間違いやすいと筆者が判断したものを、4年生までに既習した漢字の中から決めた。調査対象漢字は次の35字である。

*上越市立大湊小学校

35字	百, 歌, 書, 食, 場, 鳥, 鳴, 悪, 寒, 漢, 館, 業, 幸, 乗, 島, 美, 鼻, 筆, 遊, 様, 路, 候, 児, 童, 唱, 達, 巢, 果, 辞, 典, 無, 輪, 種, 類, 湯
-----	---

なお、調査を行った時期が学習指導要領移行期間中であるため、「湯」に関しては6年生については、取り扱っておらず未習熟であるが、5年生と同様の調査を行った。

今回の調査では、漢字の字体のみに着目して調査を行った。正答、誤答、無答、誤字については以下のように定義する。

正答	漢字の字体について、点画や構成要素に間違いがない。送り仮名が間違っていたとしても、漢字の字体に間違いがなければ正答とする。
誤答	出題の漢字について、その字体の点画や構成要素に何らかの間違いがある。 (例) 点画が足りない、点画が多い、偏と旁が逆、
無答	何も記述がない、あるいは送り仮名だけが書いてあり漢字の記述はない。
誤字	明らかな字種の違い。点画が足りない場合は、誤字ではなく誤答とみなす。 (例) 輪を輪と書いた場合は誤字とするが、巢を単と書いた場合は誤答とみなす。

(2) 「悪」に関する2回の追調査

既習漢字の習熟に関する調査の中でさらに「悪」に着目して調査を実施した。この追調査については、分析・考察の中で詳しく述べることにする。

4 既習漢字の習熟に関する調査の分析と考察

(1) 習熟しにくい漢字の画数における分析考察

既習漢字の習熟に関する調査の中で、正答率が70%未満の漢字は16字あり、右の表1の通りであった。

表1より、「幸」以外は総画数が10画以上であることが分かる。このことから総画数が多い漢字については習熟しにくいと考えられる。また、調査対象35字の総画数と正答率の分布図は図1の通りである。やはり、表1と同様に総画数が多い漢字については習熟が低い傾向にある。

総画数が多い漢字は、どの学年でも指導の際に時間をかけ丁寧に指導すると推測する。では、具体的に総画数が何画以上の漢字に気を付ければよいのだろうか。

菅野らによると、学年別漢字配当表の1026字の平均総画数は9.4画であることが明らかになっている。この研究結果と今回の調査を合わせると、平均総画数よりも総画数が多い漢字については、書字動作が増えるため間違いが増える傾向にあると言える。総画数が9画以上の漢字の指導には、より工夫が必要であると考えられる。また、指導者は総画数9画以上の漢字は、児童が習熟しにくいということを念頭において指導を工夫する必要があるのではないだろうか。

学年別漢字配当表の1026字の中で総画数が9画を超える漢字数は、表2の通りである。学年が上がるごとに総画数9画を超える漢字が増えている。特に、4年生についてはかなり児童に負担があるのではないかと推測する。4年生は、新学習指導要領移行期間前は、総画数が9画を超える漢字数

表1 既習漢字の習熟に関する調査における正答率70%未満の漢字

字種 (総画数)	正答率	誤答率	無答率	誤字率
鼻 (14画)	32	21	17	30
唱 (11画)	47	21	32	0
無 (12画)	49	17	32	2
様 (14画)	49	23	17	11
輪 (15画)	49	15	19	17
湯 (15画)	49	43	6	2
候 (10画)	51	28	17	4
辞 (13画)	52	29	19	0
悪 (11画)	52	36	6	6
寒 (12画)	56	27	11	6
巢 (11画)	56	30	8	6
種 (14画)	60	14	26	0
鳴 (14画)	62	3	9	26
類 (18画)	62	15	23	0
達 (12画)	68	30	2	0
幸 (8画)	68	21	11	0

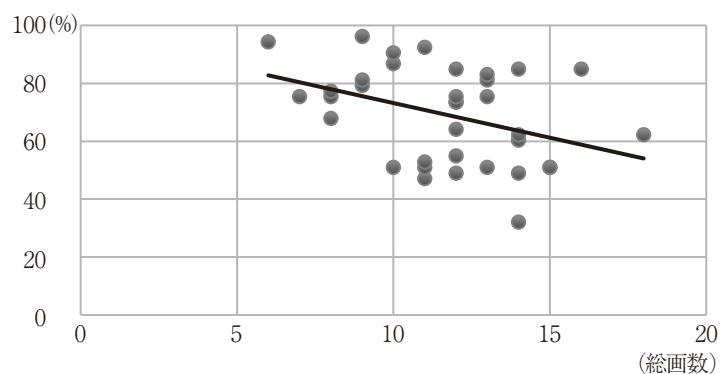


図1 35字における総画数と正答率の分布図

は、122字だった。12漢字増えたことで、総画数9画を超える漢字が6年生よりも多くなり、より指導の工夫が必要であると考え。

(2) 習熟しにくい漢字の間違いの種類についての分析考察

児童が習熟しにくい漢字16字（正答率が70%未満の漢字）について、具体的にどのような間違いがあるのかについて分析考察を行う。正答率70%未満の漢字における間違いの種類は図2の通りである。誤答率が高かった「悪」「巢」「湯」、正答率が低かった「鼻」に着目する。

表2 総画数が9画を超える漢字数

学年	漢字数
1年生	3字（3%）
2年生	68字（42%）
3年生	122字（61%）
4年生	134字（66%）
5年生	131字（67%）
6年生	133字（69%）

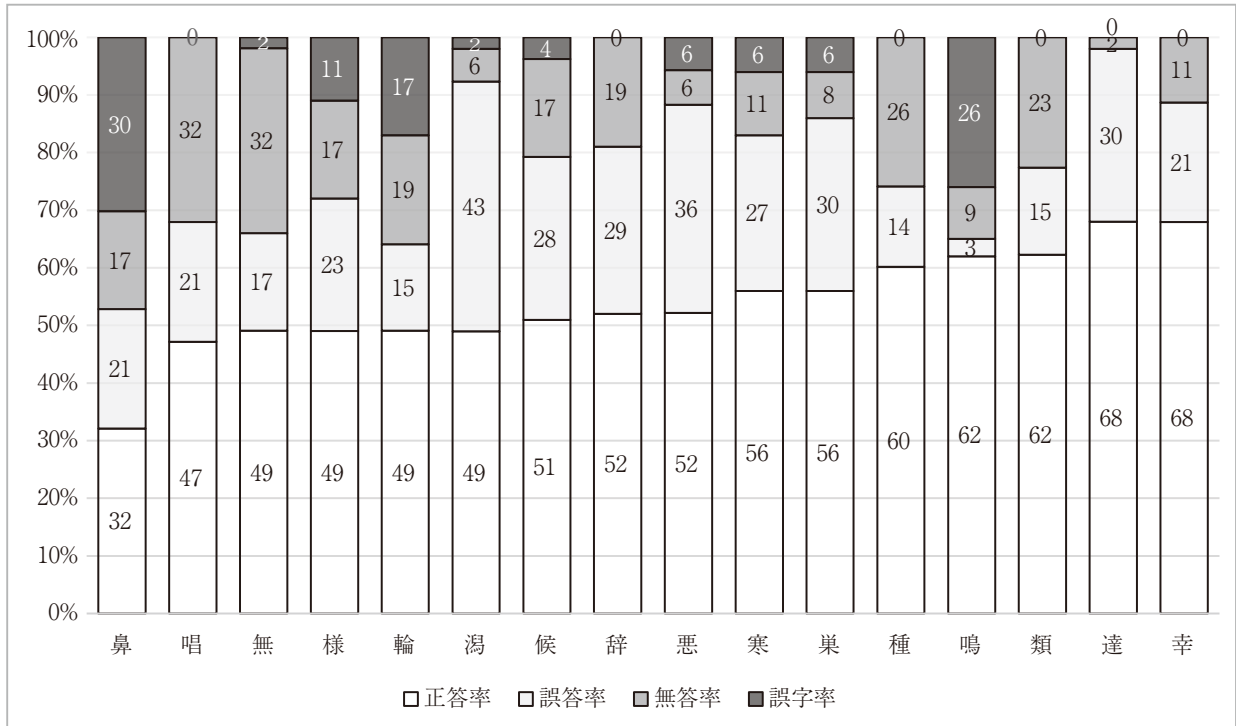


図2 正答率70%未満の漢字における間違いの種類

「悪」は、誤答が36%という結果になった。誤答をさらに分析すると、図3のような7画目がないパターンを書く児童は32%となった。(表3)「悪」は「亜」と「心」の上下の構造をもつ漢字であり、「亜」の部分に正確に習熟されていないことが明らかになった。「亜」は、学年別漢字配当表には示されておらず、中学校で学習する漢字である。5画目と6画目の縦画は、4画目の横画を突き抜ける点画であり、点画の組み立てに特殊な構造をもつと言える。「悪」は小学校3年生で学習する漢字であり、小学校学習指導要領の示すところによれば4年生でも3年生の時に学習した漢字を文や文章の中で使うこととある。今回の調査より、「悪」に関しては、高学年でも意識して文の中で使うあるいは、再度学習し直す必要がある漢字だと考える。このことについては、後で磁石筆を使用した調査に関する項で述べることとする。



図3 「悪」の児童の誤答

表3 「悪」の誤答

7画目の横画がない	32%
その他	4%

表4 「巢」の誤答

単	19%
果	5%
2画目がない	4%
1画目から3画目が草冠	2%

「巢」の誤答は30%という結果になった。児童の調査用紙を見ると、表4のような結果となった。「単」と書いている児童が19%もいることが分かる。「巢」と「単」の違いは、10画目、11画目の右払い、左払いがあるかないかである。漢字の組み立ては似ているが、漢字の意味は全く異なる。「巢」「単」については、特に漢字の意味を丁寧に指導する必要があると考える。学年別漢字配当表によれば、「単」も「果」も4年生の新出漢字である。教科書によって

学習する時期は異なるが、4年生の終わりの授業で両方の漢字の意味を確認する学習を取り入れることで、児童の習熟が高まるのではないかと考える。

「湯」の誤答については表5の通りである。先でも述べたように小学校学習指導要領の移行期間であるため、6年生は「湯」については未習熟である。そのため6年生は5年生よりも誤答率が高い。着目すべきなのは、「湯」を未習熟の6年生の児童の多くが、10画目から15画目までの点画を間違っているという点である。図4が実際の児童の誤答の文字である。未習熟であっても何となく字形や点画の種類は分かっていることが明らかになった。しかし、点画のか左払いなのかといった詳細な点画の種類については、あいまいであると言える。未習熟の漢字であっても全く分からないのではなく、既習事項や経験により児童はおおまかに記憶できている場合が多いと言える。「湯」は、4画目から9画目までも特殊な構造をもっているためそこに重点をおいて指導をしがちだが、そこだけでなく10画目から15画目までについても、重点的に指導する必要があると考える。



図4 「湯」の児童の誤答

表5 「湯」の誤答

	5年生	6年生	合計
4画目から9画目の間違い	2%	2%	4%
10画目から15画目までの間違い	7%	30%	37%
その他	0%	2%	2%

「鼻」に関して、児童の調査用紙を見ると「花」と記述する児童が多く誤字の割合30%と多くなった。調査する際に、単に「はな」と出題したために、「花」と書く児童が多くなった。調査用紙の出題の仕方に問題があったといえるが、総画数から考えると「鼻」は総画数が14画、「花」は総画数が7画であり、児童にとっては同じ音の漢字を書く際は、画数の少ない漢字の方が書きやすく、漢字としてイメージしやすいのではないかと考える。やはり、漢字の意味を指導することに重点をおく必要がある。

5 磁石筆とマグネットボードを用いた追調査に関する分析と考察

(1) 「悪」についての追調査について

既習漢字の習熟に関する調査で誤答率が高かった「悪」について6年生に2つの追調査を実施した。

4月9日
かけるかな？このかんじ
ひらがなをかんに直しましょう

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	ひやくてん 百点
うつくしい	しま	のる	しあわせ	授ぎよう	図書かん	かんじ練習	さむい	わるい	犬がなぐ	とり	はしよ	たべる	かく	うた	うた	ひやくてん 百点
美しい	島	乗る	卒業	業	館	漢字	寒い	悪い	鳴く	鳥	場所	食べる	書く	歌	歌	ひやくてん 百点
31	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	
しゅるい種類	材投げ	ない	国語してん	くだもの	すばこ	ともだち	がうしよう	じどう会	てんこう	にいがた	どうろ	ようす	あそび	ふで	はな	
	輪		辞典	果物	米箱	友達	合唱	児童	天候	新潟	道路	様子	遊ぶ	筆	鼻	

追調査① 8月29日調査

追調査② 8月30日調査

図5 3回の調査のイメージ

追調査①は、磁石筆とマグネットボードを使って「悪」と1字書く調査である。磁石筆とは、小林らがすでに調査を行っている「大きく文字が書け、かつ弾力と緩衝的機能との特性を持つ学習用筆記具」のことである³⁾。小林らにより、平仮名指導において磁石筆を用いた学習効果がすでに明らかにされている。追調査①では授業者から児童に、「『あく、わるい』という漢字を書きましょう」とのみ口頭で指示をした。

追調査②は、鉛筆でA4サイズ用紙全体に「悪」と1字書く調査である。追調査①と同様に口頭で指示をした。

なお、4月に実施した調査ではA4用紙に31問出題する形式をとった。3回の調査のイメージと結果については図5の通りである。いずれの調査の時も、正しい「悪」については提示していない。正しい「悪」について指導したのは、

8月30日の調査後である。

(2) 「悪」における追調査①②に関する分析・考察

6年生の「悪」についての正答率の変容は表6の通りである。

表6 6年生の「悪」についての変容

	正答率	誤答率	無答率	誤字率
4月8日調査（A4用紙に31字）	58%	35%	7%	0%
8月29日追調査①（磁石筆とマグネットボード）	67%	33%	0%	0%
8月30日追調査②（調査用紙 A4用紙に1字）	96%	4%	0%	0%

追調査①と追調査②ともに4月の調査よりも大きく正答率が上がっている。先に述べた5画目と6画目の縦画が、4画目の横画を突き抜けないパターンでの誤答は追調査②では0になった。正答率が大きく上がったことについて、書く速さ、書く大きさが関係しているのではないかと考える。児童は磁石筆を数回使用したことがあるが、鉛筆よりは慣れていないため、鉛筆で書く時よりも明らかに書く速さが遅かった。また、6年生が普段使用している漢字ドリルのマスやノートの手紙のマスよりもはるかに書くスペースが大きく、そのことも書く速さが遅くなった原因であるといえる。ゆっくり書くことで、「悪」の点画の構造をよく思い出すことができたのではないだろうか。つまり、

「悪」は5画目と6画目の縦画が、4画目の横画を突き抜ける字体であると認識しているが、急いで書いてしまうと、5画目と6画目の縦画が、4画目の横画を突き抜けない字体で書くというミスをしてしまうのではないかと考える。6年生であっても、ゆっくり大きく書く練習が、正確に書くことに有効であると推測する。

図6は、4月の調査で正答、追調査①で7画目がないパターンの誤答、追調査②では正答という結果になった児童の追調査②の調査用紙である。この児童は、調査用紙の余白部分に7画目がないパターンの「悪」と正しい「悪」とをメモ書きで書いている。どちらが正しい漢字だったのか迷った様子がこの調査用紙から分かる。この児童の調査用紙からも「悪」の点画の構造が児童にとっては正確に覚えにくい漢字であるといえる。先にも述べたが、3年生以降も繰り返し正しく指導する必要がある漢字の1つである。

表6の追調査②の誤答4%の児童の書いた「悪」は図7の通りである。3回の調査ともに、1画多いパターンの誤答だった。この児童については、3年生で最初に学習した時に1画多いパターンで認識してしまい、それが6年生まで続いたと考えられる。「悪」は、特に最初に学習する際に点画の数、位置、数と位置の関係をしっかりと指導する必要があるといえる。したがって、「悪」を最初に学習する時は、ゆっくり大きく書ける磁石筆とマグネットボードを使用した指導が有効だと考えられる。

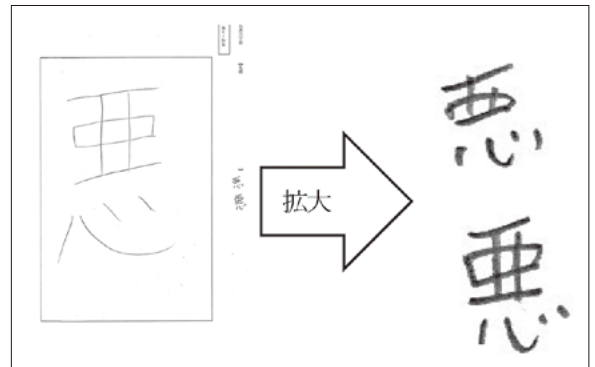


図6 追調査②の児童のメモ書き

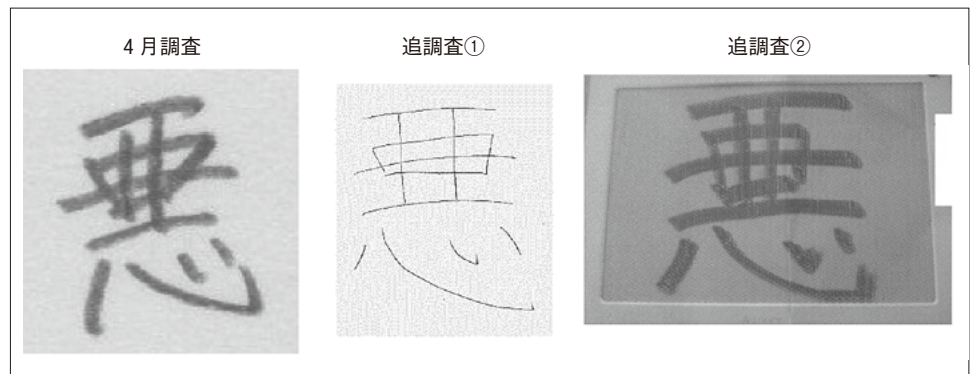


図7 3回の調査で誤答だった児童の漢字

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

今回の研究の調査では、まず、学年別漢字配当表で示されている学年で学習した漢字が、高学年になっても習熟されていない漢字が存在すると確認できた。その漢字の分析から、児童の漢字の習熟に影響している漢字の要素として総画数や特殊な点画の組み立ての構造が関係している可能性を明らかにした。その中で誤答率が高かった「悪」について追調査した結果、「悪」の「亜」部分の漢字の組み立てが児童の習熟に関係していると明確になった。今回の調査は、「悪」について行ったが、同様の傾向が「悪」以外の漢字にも存在すると推測する。

では、どのように指導をしていけばよいのだろうか。指導者は、児童が習熟しにくい漢字があることを念頭におく必要がある。総画数9画以上の漢字や「悪」のような点画の組み立てに特殊な構造を持つ漢字の指導には、「大きく」「ゆっくり」漢字を書く時間を確保することが、最低限必要であると考えられる。「大きく」「ゆっくり」を学級の児童全員に一齐に指導するには、今回調査で使用した磁石筆やマグネットボードなどが有効であると言える。

さらに、特殊な構造を持つ漢字については、最初に学習する学年で細部まで丁寧に指導し完全に習熟しなければ、間違えた構造のまま覚えてしまいその後正しい構造に変更することが難しい可能性があることも、指導者として知っている必要があるだろう。また、高学年以外の担任も、低学年や中学年で学習した漢字の点画の組み立ての構造や漢字の意味理解が、高学年での漢字学習に生きてくることを意識しながら指導する必要があると考える。

(2) 今後の課題

今回の研究の調査対象とした字種は35字だったが、字種の吟味に菅野ら²⁾の先行研究の分析をさらに加えて、調査対象字種を増やす必要がある。特に、「悪」のような点画の組み立てに特殊な構造を持つ漢字の特定は、指導方法を確立する上で有益であると考えられる。

調査方法については、吟味が必要であった。「はな」という出題について、単に「はな」とだけしか出題しなかったため、「鼻」「花」のどちらかを記入すればよいのか児童に指示がなかった。熟語形式もしくは文章形式で出題すべきであった。

児童が習熟しにくい漢字16字（正答率が70%未満の漢字）の中からさらに4字にしぼって分析考察を行った。他の12字についても、引き続き分析を続け習熟しにくい漢字をさらに明らかにしていく必要がある。

今回の研究では、追調査②で磁石筆を使用した。磁石筆を使って具体的な指導をしていない。今回明らかになった習熟しにくい漢字について磁石筆を使用した指導方法について今後検討していきたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省『小学校学習指導要領』平成29年3月告示
- 2) 菅野陽太郎, 寺島薫, 押木秀樹「常用漢字の構成要素とその筆順構造の分析」『書写書道教育研究32号』2018, pp32~40
- 3) 小林比出代, 小池勲, 押木秀樹「学習初期段階における書字動作の学習と学習筆記具の効果－平仮名の学習における磁石筆の有効性－」『書道教育研究30号』2016, pp1~10